【15】『修験安心義鈔草稿上』

写1冊（49―1）

〔書名よみ〕しゅげんあんじんぎしょうそうこうじょう

〔著編者〕海浦義観　〔写刊年次〕明治年間

〔外題〕修験安心義鈔草稿壱

〔内題〕修験安心義鈔巻上

〔その他題〕〈尾〉修験安心義鈔巻上

〔残欠状況〕全　〔保存状況〕小破（疲れあり）　〔装訂〕袋綴

〔紙数〕四〇丁　〔本文用字〕漢字・片仮名・梵字　〔一面行数〕一三行　〔界線〕ナシ　〔表紙〕本文共紙　〔法量〕縦二四・五糎×横一七・〇糎　〔料紙〕楮紙（杉原）　〔書入〕注記（墨）　〔表紙書入〕ナシ　〔印記〕ナシ　〔備考〕内容を補う文言が記された紙片が二枚挟まれている。

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

海浦義観『修験安心義鈔全』（49―4）に関する複数の資料が円覚寺に残されている。以下にその概要を整理するが、まずは本書刊行の経緯と意図について述べる。

本書の刊行については、海浦義観の一八九九（明治三二）年一月七日付海浦篤弥宛書簡にて、派内有志からの懇請によって書かれ、予約出版の形式を採ったが尽力者が途半ばにして逝去したことが伝えられている。また、そのために意外の不都合ができ、費用が嵩んで結果的に損害を得たことが率直に記されている。

派内有志からのリクエストによって書かれたとはいえ、本書は「修験門安心ノ大綱ヲ撮テ後学新発意ニ知ラシメ如実知自心ノ明玉ヲ研磨スル階梯」（凡例）とされ、「修験門ハ密教ト其宗意大同小異ニシテ初メ密教門ヨリ入リ修験門ヲ覈究スルトキハ義理明了ナリ易シ故ニ本編ハ密宗安心義章ニ基キ其章句十六章ヲ用ヒ密宗意ヨリ修験ノ秘意ニ入リ後進ヲシテ甚深究竟ノ宗義ナル「知ラシム」（同上）という、密教から修験に至る際の手ほどきとするという明確な志が看取できる。

さて、現在円覚寺に残されている『修験安心義鈔全』関連資料は以下の通りである。

『修験安心義鈔草稿上』（49―1）、『修験安心義鈔草稿下』（49―2）はその名の通りのもので、それぞれに細かな書入れが確認でき、筆写である義観の思索の跡が窺える資料である。全一六章のうち、上には第十一章まで、下には第十二章以降が記されている。全体の構成は以下の通りである。

第一　己心仏土章
第二　横竪二観章
第三　十善為本章
第四　二諦不二章
第五　三三平等章
第六　輪圓浄土章
第七　不取二相章
第八　三品悉地章
第九　機類差別章
第十　結縁勝徳章
第十一　深信頓悟章
第十二　顕密不同章

第十三　教益甚深章
第十四　但信無智章
第十五　問答決疑章
第十六　発願廻向章

「修験安心義鈔予約広告」（49―3）について、一般的に近代の出版において予約出版といえば、改造社の現代日本文学全集（いわゆる円本）が採った出版戦略の一つとしてイメージされるところではあるが、この場合はあくまで同じ宗派の寺院にアピールするためのものだったようである。

『修験安心義鈔巻上』（50）と『修験安心義鈔巻下』（26）も大変興味深い資料である。調査当初、これも義観による草稿と考えていたが、先に述べてしまうとこれは義観が印刷所に送った入稿原稿であり、それに更に印刷所の職人たちによって校正や奥付の原稿などが加筆され、著者である義観の手元に戻ってきたものであろう。明治期の洋紙を用いた近代的な出版の、具体的な作業を考える上で貴重な資料である。

さらに、「修験安心義鈔版権登録証」（52）もまた貴重資料だ。詳細は該当資料の解題にて述べるが、明治三〇年前後の時期における出版がいかに国家体制によってコントロールされていたか、その具体的な実相を示すものである。

（尾崎　名津子）

【16】『修験安心義鈔草稿下』

写1冊（49―2）

〔書名よみ〕しゅげんあんじんぎしょうそうこうげ
〔著編者〕海浦義観　〔写刊年次〕明治年間
〔外題〕修験安心義鈔草稿弐
〔内題〕修験安心義鈔巻下
〔その他題〕〈尾〉修験安心義鈔巻下
〔残欠状況〕全　〔保存状況〕小破（疲れあり）　〔装訂〕袋綴
〔紙数〕四九丁　〔本文用字〕漢字・片仮名・梵字　〔一面行数〕一三行　〔界線〕ナシ　〔表紙〕本文共紙　〔法量〕縦二四・五糎×横一七・〇糎　〔料紙〕楮紙（杉原）　〔書入〕注記（墨）　〔表紙書入〕ナシ　〔印記〕ナシ　〔備考〕内容を補う文言が記された紙片一枚、また、「謹賀新年　大屋祐蔵」と書かれた紙片一枚が挟まっている。
〔奥書〕ナシ

〔解題〕
『修験安心義鈔』のうち、「第十二　顕密不同章」から「第十六　発願廻向章」までを記したものである。

（尾崎　名津子）